

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370881

研究課題名(和文) 古典期ギリシアの記憶の場

研究課題名(英文) Place of Memory in Greece in the Classical Period

研究代表者

中井 義明 (Nakai, Yoshiaki)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：70278456

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：古代ギリシア人は墓や彫像、碑文や歴史、弁論などを記憶の場として活用していた。ペルシア戦争の記憶は Marathon の塚や祭典、記念柱や碑文に残っていた。その実例として Marathon にある記念柱や塚、アゴラ博物館にある碑文、スパルタにあるレオニダス廟や「レオニダス像」に見たのである。ペロポネソス戦争後のスパルタ帝国の記憶をアゴラに残されていた「ラケダイモン人の墓」に見、それがアテナイという異国に建設され、アテナイが敵国人の墓を破壊せずに残した意味を検証した。さらに民主政復活後のアテナイがアテナイ帝国の遺産を継承し活用していく過程を各地民主派への顕彰碑文や弁論に繰り返される言説を見ることで確認したのである。

研究成果の概要(英文)：The Ancient Greeks used tombs, statues, inscriptions, history, orations and others as places of memory. Memories of the Persian War were left in the Marathon's mound and festival, memorial pillars and inscriptions. For example, they saw them in the memorial pillars and the mound in Marathon, inscriptions displayed in the Agora Museum now, the Mausoleum of Leonidas in Sparta and the "Leonidas Statue". We can see the memory of the Spartan Empire after the Peloponnese War in the "Tomb of the Lacedaemonians" left in the Kerameikos. I inspected the meaning that it was built in Athens, a foreign country, and the Athenians left the enemy's tomb without destroying it. In addition, I confirmed the process of inheriting and utilizing Athenian Empire's heritage after the revival of the democracy in honoring inscriptions to the foreign democrats and in discourses which Athenian orators repeated in their orations.

研究分野：古代ギリシア史

キーワード：古代ギリシア史 過去の記憶 ペルシア戦争 スパルタ帝国 アテナイ帝国 歴史と記憶 記憶と政治
記憶の可塑性

1. 研究開始当初の背景

フランスのピエール・ノラ以来、国民的帰属意識の求心点として「記憶の場」が注目されるようになってきたことや、ギリシア独立以降、アクロポリスが国民国家ギリシアの「記憶の場」として創り出されてきたことを報告者自身が論じてきたことが背景となっている。

そもそも「記憶の場」が問題となったのは20世紀後半に生じたフランスを初めとするヨーロッパ諸国の社会変化が国民国家統合の危機を表面化させて来たからである。近代国民国家はフリジア帽やジャンヌ・ダルク像などに国民の帰属意識の求心点を求めたのである。特にグローバル化と深刻になる移民問題から国民的意識の拠り所として西欧諸国はそのような求心点を「記憶の場」として意識する必要に迫られるようになっていく。そして現代社会が「記憶の場」を必要としているように、古代社会も「記憶の場」を必要としていた。古代社会における「記憶の場」とはどのようなものであり、それが古代人に如何なる機能を果たしていたのかという問題関心が本研究の根底に横たわっている。

国民国家がベネディクト・アンダーソンによって近代の産物であることを指摘され、活字文化によって国民的統合を図る「想像の共同体」に過ぎないと評されている。それと同じように古代ポリスもまた英雄神の祠や神々の神殿を中心とした宗教共同体として姿を現したことがイアン・モリスやキャサリン・モーガンらの考古学者によって指摘されている。

国家としてのポリスの統合には英雄神を祭る祠や神々の神殿がある種の「記憶の場」を提供し、そしてそれぞれの英雄神や神々の由来にまつわるストーリーが作られ、語られてきたのである。勿論、ポリスを超えた種族や地域の統合にもオリュンピアやデロスなどの聖地が「記憶の場」を提供していた。何と言ってもホメロスの叙事詩が古代人にとって確実な「記憶の場」であった。人々はホメロスの叙事詩に「祖先」の名を連ねようとしたのである。

しかしそのようなはるかな過去、即ち英雄時代に遡る神話や叙事詩以外に、近過去の経験や記念碑、物語も「記憶の場」となっていたのである。ペルシア戦争、デロス同盟、ペロポネソス戦争、スパルタ帝国、アテナイの民主政復活、コリントス戦争という古典期の一連の歴史的事件が続く時代に「記憶の場」として利用されていることに気付く。

同時に、過去の記憶は願望によっても作られ、改変され、ストーリーを与えられることによって命を吹き込まれる。その基本は歴史上の重大事件に自らを絡ませることによって記憶の真実らしさを与えられ、他者の過去の栄光を共有することになる。このような過去の記憶を歴史から剥ぎ取っていくことが歴史家の課題であるが、記憶は歴史から離れた

所で一人歩きすることもある。つまり断片化された過去である記憶は歴史とは違った役を演じ、機能している。

本研究を始めたときにそのような問題を扱うことに意味があると考えていた。そして前5世紀から前4世紀にかけての古代ギリシア史こそが研究の場であり、記憶を辿る素材を提供していると想定した。研究の対象として次の三つを選択した。ペルシア戦争、スパルタ帝国、アテナイ帝国である。

2. 研究の目的

過去の記憶が古代人のポリスへの帰属意識や対外行動、自己正当化、国内の対立の中での政策形成に果たしていた役割とその形態を明らかにすることを本研究の目的としている。具体的には、まずはペルシア戦争の記憶がどのように人々の間に留められ、何を記憶媒体とし、如何に形式化され、その意図するところは何であったのかという問題に接近することを目的としている。

次いでペロポネソス戦争後のスパルタによる支配の記憶が如何なる形で残されたのか、その支配の記憶が記念碑化された理由、人々の間に残された遺産を解明することを目指した。最後に前世紀のアテナイ帝国の記憶がペロポネソス戦争敗戦後のアテナイにおいてどのように残され、コリントス戦争以降の時期にアテナイによって喧伝される海上支配と陸上支配の二分権論ないしは二極構造論、国境をまたがる民主派間のネットワーク、後世の古代人に前4世紀のアテナイ人が残した帝国アテナイの功績論を明らかにしたいと考えた。

本研究は古代ギリシアにおける記憶の場としてペルシア戦争、スパルタ帝国、アテナイ帝国を選択し、それらがポリスと同盟を統合し凝集する装置として機能している幾つかの側面に注目することから始めることにした。というのは、サイドが指摘しているように、ペルシア戦争の記憶は古代を通してギリシア人がアジアに対して優越した資質を有しているという根拠として利用され続けたからである。

更に、近代以降の高等教育においてギリシア・ローマの古典が重要視され、古典の読解を通して古代におけるギリシア中心主義的な観念が近代人、とりわけ社会的エリート層の間で共有されていたことも見落としてはならないと思われた。そのギリシア中心主義が近代ヨーロッパ諸国による植民地支配を肯定化するのに利用され援用されたことは良く知られており、本研究の背景を成している。

ペルシア戦争に関してはマラトンの戦いとテルモピュライの戦い、そしてサラミスの海戦を取り上げることにした。マラトンの戦いに関しては戦場跡に残る巨大な塚(ソロス) マラトン博物館にある記念柱、『スーダ』に収録されている「コーリス・ピッペイス(馬

は去れり)」の逸話を記憶の場として論じることとした。テルモピュライの戦いについてはシモニデスの作と伝えられている有名な哀歌、スパルタ市内に構築されたレオニダス廟、スパルタ国立博物館に収蔵・展示されている「レオニダス」像を取り上げるのが良いと判断した。サラミスの海戦についてはアゴラ博物館で展示されている碑文、コリントス人の墓の銘文が適切であると判断した。

スパルタ帝国に関してはリュサンドロス、三十人政権、「ラケダイモン人の墓」を記憶の場として研究の対象とするのが適切であると考えた。リュサンドロスについてはクセノフォンの歴史やプルタルコス伝の伝記、アイゴスポタモイの海戦勝利記念碑を取り上げることにした。三十人政権に関してはクセノフォンの歴史やリュシアスの弁論などが手掛かりになると想定し、「ラケダイモン人の墓」についてはそのトポグラフィとサイズ、残存状況に注目すべき指標になると評価している。

アテナイ帝国に関しては前4世紀の記憶を対象とし、アンドキデスやイソクラテスの弁論、クセノフォンの歴史、外国人への顕彰碑文を取り上げることにした。

ペルシア戦争の記憶がアテナイの対同盟都市政策を正当化するのに利用されたこと、帝国と評されるアテナイの政策を推進する口実にされたこと、ペルシア戦争後のアテナイとの対立の中でテルモピュライの戦いがスパルタの立場を主張する記憶の場として用立てられたことからこれを分析して見たいと考えたのである。

スパルタ帝国の記憶はペロポネソス戦争後のアテナイが置かれた苦境につながる。リュサンドロスにまつわる記憶はアテナイの帝国解体、三十人政権は対外的隷属と恐怖政治、「ラケダイモン人の墓」はアテナイの内戦と民主政の復活、そしてスパルタとの微妙な関係の中で国政を運営せざるを得なかった前390年代の記憶と直結している。

そのアテナイをスパルタの顎木から解放したのがコリントス戦争であるが、民主政復興からコリントス戦争までの期間、アテナイは旧帝国の記憶を利用して民主派のネットワーク再構築に着手している。海上覇権はアテナイの権利であり、アテナイが海上を支配していた時代、諸国は平和でありその自治を脅かされることはなく、ペルシアがギリシア世界に干渉することもなかったという言説を展開するのである。これらはクセノフォンの歴史や、アンドキデス、イソクラテスの弁論から窺い知ることが出来る。

過去の記憶は様々な局面において構築され宣伝され、ポリスや同盟への帰属意識を凝集する機能を期待されていた。その為に記念碑や墓、碑文や弁論が利用されたのである。本研究はそのような記憶の場としての機能を明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

テルモピュライの戦死者を悼むシモニデスの作とされる哀歌が記憶を語る文学のジャンルとして利用され、表現様式の定型化が図られている。この記憶の表現形式の定型化は古代世界において共有されていただけではなく、既に触れたように近現代における古典主義教養教育の中で時代と地域を超えて拡大・継承されることとなった。このようなエリートたちの知的伝統が社会の中で受けて来た高評価と果たしてきた役割を本研究の枠組みのひとつとした。

テルモピュライの哀歌、サラミス出土のコリントス人の墓の銘文(ML. SGH1. no. 24; cf. Plut. De Malig. Herod. 870e)、第一次世界大戦後の戦没者記念碑、コヒマのイギリス軍戦没者を埋葬する国立墓地の銘文には詩の様式に統一性があることが認められる。その背景には古典を重視する近代ヨーロッパにおける高等教育が存在していた。テルモピュライの記憶が20世紀初頭において発掘されたのはジョン・マックスウェル・エドモンズに負うところが大きい。このエドモンズが古典学者であったことを指摘するだけで十分であろう。古代においても近代においても古典の教養が社会の中で高い評価を得ていたという文化的側面を我々は認めざるを得ない。

また戦勝記念の標柱やそこに記される銘文、戦死者を埋葬する墓や塚のトポロジーに政治の力学が働いていることに気づかされる。オリジナルから削り取られ、書き換えられた銘文はポリス内部で対立する利害、政治勢力の消長を窺わせる。トゥキュディデスが伝えるパウサニアスのデルフォイ奉納碑文は、パウサニアス死後スパルタ当局によって書き換えられているし(Thuc. 1. 132. 3)、アゴラ博物館所蔵の碑文(IG. 1³, 503+504)も中央部の銘文が削り取られ、その表面に新たな銘文が刻まれたことを示している。オリジナルの銘文を奉納した最初の人物と、それを削り取らせ書き換えさせた人物との対立を窺わせるものではある。

戦死者を埋葬する墓やこれを称える銘文はそれらの事物やそれらに記されているストーリーに期待を寄せる政治的效果や場の選択に働いた政治諸力、さらにはその背景にある埋葬や墓の文化に接近する重要な手段と想定できる。さらに前4世紀初頭のアテナイ再建期に帝国の遺産と記憶が単なる懐古ではなく、外交政策の要として機能している側面をコリントス戦争前の旧親アテナイ派指導者たちへの顕彰碑文に求めていくことが本研究にとって有効であると判断した。

4. 研究成果

ペルシア戦争をギリシア人の記憶の場として活用するデロス同盟期のアテナイの国家戦略が広くギリシア人の間に浸透して行ったことを先ず確認した。次いでペルシア戦

争の記憶に自らを接続しようとするイオニア人や、マラトンの記憶に対抗するためにレオニダスとテルモピュライの記憶を利用したスパルタなどの事例を明らかにした。最後に記憶の表現には一定の形式が求められていたことも考察の対象とした。

その結果、マラトンに戦没者の巨大な塚を築き、毎年戦没者の栄誉を称える祭典を挙行了した(Cf. Thuc. II. 34. 5)アテナイに限らず、スパルタもテルモピュライの記憶を積極的に利用すべく、レオニダスの遺骸を持ち帰り、レオニダイオンという英雄廟を建立し記念碑化したことが知られている(Paus. III. 14. 1)。そのみならずプラタイアでペルシア軍を撃破し、ギリシア本土における戦争を終わらせたパウサニアスが自らの功績を記念する為に、三匹の蛇が絡み合い、黄金の鼎を戴く記念柱をデルフォイに奉納し、その表面に自らの功績を誇る銘文を刻ませたことはトゥキュディデスによって伝えられている(Thuc. I. 132. 2)。現在この記念柱はイスタンブルに現存しているが、その側面にはスパルタをはじめとする31もの同盟国の名前が残されている(ML, SGH. no. 27)。これらの行為はペルシア戦争の記憶の独占に他ならない。

しかし、同時にペルシア戦争の他者の記憶を共有しようという試みが第三者によって企てられる。プラタイアの戦い直前にマケドニア王アレクサンドロスがアテナイ方にペルシア軍の窮状について情報を伝えたという挿話(Hdt. IX. 45. 1-3)はそのような試みのひとつに過ぎない。恐らくはこのアレクサンドロスの挿話にヒントを得たと思われる逸話が後世のイオニア人によって作られる。「馬は去れり」という『スーダ』に収録されている記事である。ペルシアの宗主権下に組み込まれていたイオニアのギリシア人たちはマラトンの時もサラミスの時もペルシア軍の一翼を形成していた。しかし『スーダ』の逸話はこの事実と反する物語を展開する。マラトンのペルシア軍から騎兵部隊が消えているということを知らせたことがアテナイ人に勝利をもたらしたというのである。ヘロドトスの逸話(先述)との類似からこの逸話は捏造であることを疑わせる。しかし重要なのはこのような逸話を必要とした事情にある。ギリシア人の裏切り者とされるイオニア人(Cf. Thuc. VI. 82. 4)がペルシア戦争におけるギリシア人の栄光に寄与しその記憶の共有に与かることを切実に必要とした事情があり、そのような事情の結果が「馬は去れり」の挿話を生み出したと推測した。

ギリシアをペルシアの頸木から解放する為に自らを犠牲にした戦没者の霊を慰めるためにペルシア戦争後、ギリシア人たちはテルモピュライの戦場跡に獅子の像を建立しその台座にシモニデスの手になる哀歌を刻んだと言われている(Cf. Hdt. VII. 228. 2 ;

但し、シモニデスの作品かどうかについては現在否定的な意見が出ている)。通りすがりの旅人に彼らのことを故郷の人々に語り伝えよという詩文は戦没者に捧げられる言葉の定型となり、同時代の人々に、また後世の人々に踏襲されるようになる。つまりペルシア戦争はその記憶を物語る詩文の形式を作ってしまったのである。

アテナイがペルシア戦争の記憶を同盟諸都市やその他の諸都市に対して帝国政策を正当化するプロパガンダに利用したことはトゥキュディデスの演説に散見される(Thuc. I. 73-74; VIII. 82-83; 尤も第二次ペルシア戦争の際に同盟軍の指揮を争ったときにアテナイはマラトンでの戦功を挙げていることも参考になろう; Hdt. IX. 27. 5-6)。そのアテナイの支配はスパルタとのペロポネソス戦争によって瓦解してしまうことになる。ペロポネソス戦争後ギリシア世界を支配したのはスパルタであった。その支配は民主政や民主派に対する抑圧と、民衆に敵対する政治勢力への肩入れによって悪名を残すこととなった。

アテナイ人や民主派にとってリュサンドロスが各地に樹立した三十人政権や十人政権の恐怖が支配する独裁と弾圧は拭い難い負の記憶を後世に残すこととなる。その際、アテナイにおける恐怖政治を終焉させた内戦にスパルタが少なからず関与したことはクセノフォンなどの記述によって伝えられている。民主派に有利な裁定を行ったスパルタ王パウサニアスが居なければアテナイの民主政復活は不可能に近かったであろうと思われる。またエーゲ海各地の寡頭派政権を除去するのも困難であったと考えられる。そのような記憶を明らかにするひとつの手掛かりを提供しているのがケラメイコスに残されている「ラケダイモン人の墓」である。

「ラケダイモン人の墓」はアテナイの国立墓地の一角、市門に近い一等地を占めている。墓は七層に積み上げられたポロスと呼ばれる凝灰岩によって作られ、13体のスパルタ人戦死者の遺骸を収め、ラコニア文字で被葬者がスパルタ人であること、同じく戦死した2名のポレマルコス(指揮官)の名前が目よりも高い位置に残されている(Cf. Xen. Hell. II. 4. 33)。問題は何故敵対した異国アテナイの地にこのような墓が築かれ、そして今日まで残されたのかということである。

トゥキュディデスなどの古代の作家によればアテナイ人は外地で戦死した仲間市民の遺骸を祖国に持ち帰ったと言う(E. g. Plut. Nic. 6. 5)。しかし同時に、戦死者を必ず祖国に持ち帰り、国葬によってその栄誉を称えるアテナイの文化が必ずしも他のポリスに該当するわけではないことも古代の作家たちは伝えている。

その例がスパルタである。スパルタでは戦死者を戦場に埋葬するのを習いとしてきた。アルゴスの女とスパルタの女がスパルタ人

戦死者の墓とアルゴス人戦死者の墓について論争する逸話(Plut. Ages. 31. 6)はこの問題に関する興味深い埋葬慣習の違いを示している。スパルタ人は戦場もしくは戦場に近い地に戦死者を埋葬している。従ってペライエウスの戦いで戦死したスパルタ人をアテナイの地に埋葬したことは決して慣例に背く行為ではなかった。

その上で、何故スパルタがケラメイコスというアテナイの国立墓地に自国民の巨大な墓(塚)を残したのか、またアテナイが三十人に味方して戦死した敵国人の墓を自らの国立墓地に埋葬するのを認めたのかという問題が浮かび上がる。本研究ではこの問題を前5世紀末から前4世紀におけるスパルタ国内の事情、国際場裏におけるスパルタとアテナイの関係、アテナイ内部の事情の三点から接近した。その結果、アテナイに立派な戦死者の墓を構築することがスパルタ国内での批判派を抑え、パウサニアス王の政治的立場を強化するのに役立てられたこと、アテナイの従属性とスパルタへの忠誠を求める指標として利用されたこと、アテナイ国内の急進派を抑制し穏健派による国家再建を容易にする手段として利用されたことなどを推測したのである。

これらはいわゆるスパルタ帝国の記憶と言える。ではアテナイは前4世紀の90年代に如何にして民主政と強力な海軍を持つアテナイを復活させたのであろうか。敗戦によって失われてしまった帝国の遺産は完全に消えたわけではなかったことが明らかである。

帝国時代に育まれたエーゲ海各地の民主派とのネットワークはペロポネソス戦争の敗北によって打撃を受けたが、消滅することはなく生き延びたことがその後の歴史から知ることが出来る。その民主派間のネットワークの再構築と拡大をアテナイは図り、そのネットワークを利用して海上勢力への復権を企てるのである。前490年代のアテナイの決議碑文は国外に追放され亡命生活を送る親アテナイ民主派の人々への顕彰や、スパルタとの伝手を求める海外の民主派に支援の手を差し伸べていたことを示している。

その際、ペロポネソス戦争中の彼ら民主派亡命者たちのアテナイ市民への支援と好意を決議文の中で指摘することをアテナイは忘れてはいない。アテナイ帝国は敗戦とともに解体し、三十人政権が行ったように旧帝国時代の決議碑文は大量に破壊された。しかし他方では破壊された碑文の再建が試みられ、旧帝国時代の記憶を呼び戻そうという努力が積み重ねられていた。サモス民主派との決議碑文(IG. I³, 127; IG. II², 1)とタソス民主派との一連の決議碑文(IG. II², 6; IG. II², 24; IG. II², 33, cf. IG. XII, 8. 263)がその好例である。

そしてこのような旧帝国の記憶の保存と掘り起しから、コリントス戦争期に大いに喧

伝されることになる旧帝国時代のギリシア世界に対するアテナイの功績が強調されるようになる。そしてそこから海上覇権はアテナイ固有の権利であると主張され、スパルタは陸上を支配しアテナイは海上を支配するという国際関係における二極構造論が展開されるという風につながっていくのである。

またアンドキデスの弁論『平和について』を手掛かりに、コリントス戦争前半期に構築され展開された二極構造論の構想と論理、その中に見られる旧帝国の記憶とその正当化のあとを辿った。アンドキデスでは未だアテナイ国内での議論にとどまっているが、コリントス戦争の後半期になると二極構造論は積極的に国外に向けて発信される。スパルタがギリシア人の自由をペルシアに裏切り渡し、そのスパルタとは反対に旧帝国時代のアテナイはペルシアの頸木からギリシア人を解放したという言説を構築し、記憶という形で外交の場で積極的に活用ようになる。解放者としての旧帝国の記憶が公式化され、国際的にも認知されるようになるのが前387年のアンタルキダスの平和においてであった。その結果はイソクラテスの弁論や第二アテナイ海上同盟の結成を提案する「アリストテレスの決議文」(IG. II², 43)に見ることが出来る。

此处に過去の記憶は過去への追想に留まらず、現在において利用されるべき言説であり、現実と位置付けられ、未来の在るべき方向を指し示すのである。記憶は過去に根差すが過去に属しているのではない。必要に応じて形を変え、時代と状況に合わせて過去を物語るストーリーを付与され、自己を象徴するものとされ、それを操る人々や社会に都合の良い未来を指し示す理念へと昇華していく。言わば記憶とは実に可塑性に富む仮想現実と評し得るのである。

本研究を通じて古典期ギリシアの記憶をペルシア戦争、スパルタ帝国、アテナイ帝国という三つの諸相から観てきた。その結果、記憶は過去を説明するものではなく過去を脚色するものであり、歴史が事件の正確な再構築を目指すのに対して記憶には歴史に求められる正確性を求められることはなく、むしろ常に現実の中で創造され色付けられストーリーを与えられるものであることが明らかとなった。つまり記憶は常に歴史にまわりつくが歴史にはならず、むしろ政治に属しているということを示した。このような結論を得ることで本研究の目的は十分に達せられたと確信している。

最後に研究者たちから疑問が出されていたスパルタ国立博物館所蔵の所謂「レオニダス」像について、国立博物館側の公式の見解に接することが出来たことは大きな成果であった。2016年の段階で国立博物館は問題の石像を「レオニダス」像と断定的に表記せず、「レオニダスと言われてきた像」と大きく修正している。石像の様式が前5世紀初頭のも

のではなく、生身の人間を裸体で描く（神や半神として描く）ことはないという指摘が妥当であることを国立博物館は認めたのである。この問題は首都アテネに対するラコニア県の主邑スパルティ市のアイデンティティと結びついており、アクロポリス山頂斜面から出土した半身の戦士像は歴史上のレオニダスの姿を写した記念像でなければならなかったのである。これは独立後のギリシアにおいて巨大化していく首都アテネに対する地方都市の対抗軸のひとつとして構築されたということでもある。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

中井義明、「ペルシア戦争の記憶」『歴史と記憶の形成』、人文研ブックレット No.51、査読無、同志社大学人文科学研究所、2016年、4-21頁。

〔学会発表〕（計 1 件）

中井義明「ラケダイモン人の墓：帝国の記憶の場」、属州研究会、2015年4月29日、同志社大学（京都府・京都市）。

〔図書〕（計 2 件）

Y. Nakai & P. Carafa (eds.),
Memory of the Past and its Utility:
Supplement,
Scienze e Lettere, Roma, 2016,
pp. i-vii+1-48.

Y. Nakai & P. Carafa (eds.),
Memory of the Past and its Utility:
Nation, State, Society, and Identity,
Scienze e Lettere, Roma, 2014,
pp. i-xvii+1-295.

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中井 義明 (NAKAI YOSHIAKI)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：70278456

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()